

源氏系圖

57X
27
60

大上天皇

万葉集

都清

秋好

六布

櫻國成吉

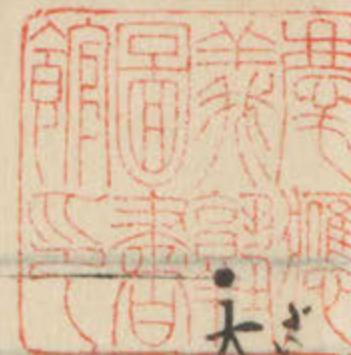
種缺院

賀人御子也淡燒風雲

天皇文

天皇文

天皇文



大上天皇

あすひの參よアマミ位をゆづりるアマミおうほアマミらの參アマミ
くくれぬアマミさりづアマミの門アマミよりアマミはアマミ相帝アマミともアマミ

都坊

故院

秋好中宮

母六条アマミれアマミ昌アマミ和アマミ

あすひよアマミ秋好アマミよアマミうち候アマミとアマミたげアマミくアマミ都アマミへアマミくアマミ候アマミ
済合アマミよアマミ國アマミよアマミあすアマミかアマミてアマミ梅アマミつアマミ下アマミとアマミ下アマミしアマミ女アマミよアマミ中アマミ文アマミ

桃園式アマミ宮

うき給アマミすアマミうす雲アマミの參アマミよアマミこう

槿敏院

うき給アマミすアマミうす雲アマミの父アマミのアマミ眼アマミよアマミてアマミりアマミせアマミ桃園文アマミよアマミ父アマミ文アマミとアマミあすアマミもアマミ

まゆみよ ワキ付櫛とあ

三宮 院のひだり内股也 指政の小方よりもすりふ。板ぞの匂乃

卷ようちれ後 わき付とあとあ

女立宮 桃園家よ位みよ。絶ぐかよみよ

朱雀院 わき付朱 母ハ弘徽殿太后

相つやの巻よ裏家。あづひの位よつま後。ミおげく。くわと裏家よ譲。もうちれ上よれぐ。おろして西山の寺よすまを候。同巻六条院内室の所よ。院ヒア門也

今上

母義香殿女

明石の巻よ二歳ども。もおげく。裏家。梅がえり
れ元眼。もうちれ下よくわぬよ。いと絶わき付全

女一宮

もうちれのすゑも

落葉宮

母ハ一条内皇后

昌利の下よ。柏木左衛門守のかすよらり後。後ア

タガチの太将よ。いとうとあ

二ノ内親王 母ハ先帝源氏家

られよ。六条院よ。つて。月下よ。二ふ。後。柏木。巻よ

むるをうこちり。わき付とあ

女四宮

わき付よも

春宮

母ハアノの中定

もうちれよ。じうのひよ。向よ。防よ。わき付とあ

式アツ宮

母ハ月妻文

三白ふえの巻よダ寧方け中もとて、六条院の寝殿を
やすこあつ一宿。二、三とましやげうすよ式アツ

白若アツ宮

母月上

ヨクレトヨじまれ経。白えの巻よ、ぐんづきて、おもつよ
うんじ、しらきのうへやーうちれ経。一、三、五や、四はく
着衣

母宇宿の中、五

やどり本代巻よじまれ経

常陸宮

母ハ更衣

白えの巻よ、タゞちのち持のきゆのうへりあくトモ
経。一日、若アツエよ、三日へときれ一人、四日と二日へ

中務宮

母ハ月妻文

月の日モ、日夕事の大將もひにうちて、車よのを経
トムのえ、あづまやよだえのぬちや、九時まづら経。又や
ざりうに上野のみこと、安上よそすの経。一人

一ふ宮

母月妻文

これもむろさ紀の上やーうひひて、六条院の南の町よ
すまを経。ゆう大將心けきて、まづり一人
女二宮

母藤づくの母

母月妻文

やどりも内のかうよて、ゆう大將をじるよを経

七歳

て添の姓を経て十二とて元眼。ばくまくよ中將

母月妻文

母月妻文

母月妻文

母月妻文

六条院

大上天皇の号をえゆふ。ワキ付ほ
タノ霧危大臣 每葵上

もれづくよ肉。喜文の昇殿。じゆよ元服してあまによ
てうちのばふ。月參の秋除月。ようづからぬ。禁菴院行幸
の時。内侍よちう。玉ノヅ。よ中將。萩禪。よ寧相。中將。萩の
うそよ。行中納言。よれよ。よ大將。同下。よ大納言。よて
左大將よ。時を。向家の參。よ大將。大將行川。よ左大將。諱大將。
ジス

薰右大將
外、朱雀院女三の文

相本の參よすれり、白家の參よ先附して、西位の侍
後どもとし。その秋右近中將あきうじんのちゅうまさ、同參どうさんよ三位さん一いっ、
寧相なつきあうより、中侍なかし竹たけ河かわよ中納なかのう云いやざり其の二月つばつより、

明石中宮 母ありのう

もひけうの三月。明石の海にてまれに松風の船。
のびりて大井^{おほい}よりすらぬ。すと雲は六条院へひくへ宿す
のうへ。善^{よし}くへまつりて、うげいあやどさんわが法^{ほう}
よ中え。匂えの參^かよ皇太后^{ごうたいごう}え

右衛門總

母三条上

ヨリレトヨ朱雀院の参のあづれ時、ひくひてまつり
き。冬木の夜、ひくひてまつりも。白木の参よのそら
れ日出はきくへ。又うわふせうのえ。すなまつて御葉
え経一日。中木の出はれ玉てありて。すかう。あ
げまじによしきくへり

中納言

母友内侍

六条院友のれくじくでやーきの後次ノモ。朱雀院
のれまきれきく。ちう。き。萬日あよ。ふと月にくまつり
のふく。づれトヨシ。白木の参よ。ひくひの因。お出る
のうしと。うづく出はきくへ

右大辨

母三条上

うか木の参よ。ひくひれ日出はきくへ。ひくひと
ようじくまつり。うづく。あ。づれトヨシ。ゑ

侍従宰相

母准らもく

うか木をだ。白木の参の出をうての時。室宿へまつり

源寧相中将

母三条上

ゆくひあくへ。サ持竹河三位中将。同參。寧相中將
あくがく。權中將。ひくひ。えまほろーの参。ア
あく。往きて。ひくひ。發上。あく。ひくひ。ばく。ばく。

頭中侍

女内侍

竹河は源サ侍こつらやさりまは句文六。もようひ

そり侍一時。ちくゆくのれひうて。まくらもひきて

じほくへ一人椎木はスヰ中侍こづるび人あくべー

四位サ侍

女三条上

一承まわらやみの時。狭河傍教のむらへ中。まわはつね

きく一人竹川は若傳佐。もあがくと。差人若傳佐こづる

童

女御らも

やさりあり。今上の女二。夜のえんき。一時。壁。まき

へあく一人。ちくぶとあく

春宮女

女三条上

系六

うゆまの譽。よし家へまつり侍

中志

母がち

二丈のきのく

三志

女内侍

四志

女三条上

五志

女おち

以上三人タガヤの譽。よし

六志

女内侍

やさり本よ。白家は小く、よから侍

童

あかせうさ

女内侍

りくハ艸家じ。女は年産院の行まぬ時。考ア卿

すき丸

まくべ

まくべ

まくべ

うち侍つて、御事よもよも

侍従

ぬまのまほのま

梅えよ六条院うちうのれづひそが本さうそ

一人

童志

同

び二人下れ下よ。朱雀院のれ葉のち、方巖樂

まひゆ

宮の方

ぬまじにぞくに

又うき落て後ぬふよぐて。檢察大納言のととに
すと落白兵アマヌシドウシズラスの落一人

三

四の宮

ぬ義香飯女内

仲宮

もみぢのじに。秋風未ちひすひ一人

八の宮

やううた六条院の馬場のゆく。そ。およれ音のま
くもひどどりてももゆひ一人

ぬ大にぬ

う浴よう浴らぬ。御娘のま紀よもよも。うもく乃

家とよさわはへ

絶角大志

ぬ大にぬ

あけま紀の寒ようをぬわは

中志

ぬかうト

うげま紀よ。昔のまよあひて。早蕨よ二条院へひ

人

られゆつりき材中

舟 深舟 むひづらがづまれまくわる

やどりよみのうちうのびりて車屋よすはよる。

むうひよ小野よつち活ワキ材中

式ノツ宮

あづまやの巻よじすれ更。ゆう大将よくまくらー人
ひこうの巻ようをりくすうしも。ゆふお博のまらきつち

侍従

母りとのまよのま

「宮志」

母おうト

父やうききてのち。あー比一翁のあへまつま

うかがは博くとくすけめぐれへん

冷泉院

母うよ雲の女院

あづまよ去ええおげくよめそくわ。これ下よだよわ
ほ。十のれふとよきりまは冷

一宮

母ひげくろの大尼女

女一宮

母ひげくろの大尼女

一のゆやうともあね

女二宮

母一えよぢちド

竹河よ生れ後。えい一えは姫也

母生薙院よぢちド

一ふ宮

母生薙院よぢちド

女一のよやうり。一ふのくくに上よも

女二宮の

芝山院

うすいよきのいはきよかねらまよ院のひづくよも

てかりさせぬ事三。まことあり
えへ

式
宮

もめへ等とまじ。しゆる式うらわ

薄雲女院

后文の室まぢり

きりつがよ肉へりつり筋ニキ。若つうとまくわゆ葉蟹蟹子
とうぐ
喜文代れも女郎をそそて。おまえ紀よまく筋。とうふ

今よりおうへんにあげてよ大上天皇よもよか

文
集

外更衣

朱雀院。喜家。此時。うつま。うつむ。女三。をう。名取。

游中納言

うちも風ふたが傳傳承え六条院より西へ

卷之二

朱雀院へ参り立の日。白虎

着志。朱雀院へ参り立つの日、白鹿章主ひ一人

中將

民ア大備

民ア大備

三
人
は
か
わ
れ
た
大
將
の
少
し
里
を
か
わ
れ
一
時
父
の
一

ヒゲ ハラコヤハウの もう
黒大将室

母今の方

大將軍ひらりのと、ひし一人
母嫁家大納言女

さゞらひのけ原氏の意じへらう後夜のうそと車
をゆきされば法ほうされり

冷泉院女九

五月蠅至小方

アシのアシモハナラシ

萬陸宮

阿闍梨
私云御多の巻す醍醐の阿闍梨
源氏のれハ傳フまフリて、べたソリソリ
あらまく風かづり一人

萬に生れ、ともかくひきの身す。庶民の多くあり。萬に生
れ、ひきのやんこ。山うらのやつをけまし。
攝政太政大臣

まちづがよそ大にうて、源氏の志のか冠ハタケを一人うち。ま
木の春よ後ヒトト休ハシ、おめくろシテ太政大臣タケイジンより太政大臣タケイジンより

大政太佐仁

うもつぐよ爲人サ得。もくまにス中將。紹榮號。ム玄

位下。次广より宰相。中将。こちづくの侍。中納。うす雲
ノ侍大納。云うて。左近大将と並んで。どどく。内大臣。友乃
う。じに太政大臣。され下。」後はの表。そまつりき。
うをゆる。うしゆる。の表。うもゆり。うけい。かく。う
中年

うじうきに小山へ旅食のれひ人よアソラ一人差の
えんの中侍。手ちよどまつりあひてじそよまびんらう
ベーダグイの巻の巻人手とれ人よアソラ

藤大納とう
春宮大かみのみや主ぬし

春官大史

南山人

さひきつれすまつりぬ一人や。不^{えん}ばれ云達^{えん}どあつも。
とらえの左房^{さく}門^{もん}猪^{いの}猪^{いの}中^{なか}胡^ごと^うさ^うやふとこの人^{ひと}、乃^の
復^しふや。お^はく^はお^はく^は左房^{さく}門^{もん}變^かす^く。

卷上

卷之三

柏木權大納言

外二条太政大臣室君

し女と左近サ持てて右近中将と火ノ火の中将。是る
上は寧相太傅門徒。同下は侍中納言柏木參と子の柏
木大納言。うりて。ほどれくうをゆ

卷之三

卷上

丙子

卷之九

ひる人ひかげくよ元服。御音。寺サ得。これよスキ。だ
カトトコ左大兵。柏木。大納戸。どうり。時一条のま
のれ。対。それ一人。す。じー。冷泉院へまづ。一。の
人。うえべー。お梅。お梅。大納戸。こ。も。竹。ば。右。人。納。戸。左
大将。け。左。大。戸。右。兵。右。兵。又。准。本。右。白。文。の。御。紫
ま。う。で。の。れ。ひ。く。人。ま。つ。右。大。納。戸。も。この。人。吸。ぐ。一。や。ざ。
ま。あ。う。も。や。よ。つ。ろ。て。大。納。戸。ご。づ。る。不。審

大史

紅梅よづくこそ毎日の家へゆきとて志のり弱病一人
れいはるえんの
鹿奈養女れ 母故小方

中君

中君
さうくんのうき
おひるのうき
おひるのうき

藤宰相

本發了兩份稿子。第一份人多

の六院と号す。又そのそつて、少三院と號す。人や冷虫は六条院と號す。ひて、冷泉院と號す。もしくは人や

の六院と号す。又そのそつて、少三院と號す。人や冷虫は六条院と號す。ひて、冷泉院と號す。もしくは人や

頭中將

中將
ひしのやう

ひ二人幻の巻よ。ゲダうちれ志士もやうへあじとーゆくす。めぐら
うくまーくじだらのあづどつす。又タまちの大侍。一

余文よりひき落とすて、ばサ舟とつひそて、らむる。
表ごさひじよへと、まくこの落とせととく。サ御云。兵
隊の佐。内は、おまこゆりーもづれ。まうれ町。共侍佐。おま
ごつすもこれぐごうどー

八郎君

まじぐく。諸哥の時、まくへそわちー人友の、ふ
の行す。禁王恩まいーもれあらまー

主髪尚侍

サタクの、人

四の、うタ、不の、人の、みどりうて、ほくへくふと。年
下、まづの、參よ。まくの、ぬが、夜、ぬよ。肉侍様、行ふ。
ひげくろの、かづくよらうきよ

弘徽殿女内 伊月相本

ミハゲイー。十二にて、内へまゆりたよ

夕霧大内室

母孫家大納言の、今の中方

雲々の、もりりく、うちす。もいー人、まはま。

近江君

母祖さきもく。うれまく、人

二条大政大臣

ワ、けふだ

朱雀院。母方。八祖父。もめ。ぶ大臣。明石。太政大臣。うきく。福

藤大納言

頭奇。まく年。白虹。日。ばつ。あけりと。浦。もく。人

鹿京殿女内

朱雀院。うす。おれ。の。み。まく。と。し

西位サ持

うやく。おのえん。も。一。や。し。孫氏。の。ひ。し。く。

まつりて、まーうべてのえも。じとじとへへへへ

危中年 け二人は源氏おびら月夜のり井戸のまゆく
かのうんのうねよへとつけて、まきはー門弘徽殿さん

出が人のふをくわきへんや、えう年の春、中将え乃

もけあひ、つゝとこれへへや

弘徽殿大后 りきは弘徽殿スハ迎み

朱雀院のぬ、あづひは皇太后、うとゆりゆつれ上よも

堂神宮小方 まのうんの巻よも

後は大内室 四、五どううへき

立君

堂のうんよも

一臘月夜尚待 磨月 あづひは朱雀院よまつて、じうげ、

まきは、すゑよ肉得、りふか下に危よあらぬ、六のまことつ

・危大内

・御 冷泉院ぬ、うの時のぬ、ままでぐー所よも

・危大内 けえよと大内、よしれ上のとび人よも

・大内

修理大内 け二人、おれひとけくはあく

後室女

今土裏えのれ時よまつて、まつり、けい

えよとまれぬ、おニ、えいりき、つこしてまつり、けい

・二のえれへや

・危大尺」竹町危大尺の号も

久々の事、
タラリたがく、れぬ。寧相の中侍、うる人のサ侍と云ふ。

一時おひうえのひふ

右大臣 今上の内改めよりよだ大臣もあ

鑑黑太政大臣

大將より志大將。上は左より拂ひ。月下より大將。之て
之大將と辭を。新帝代へり。うそと。拂ひ。太政大臣。
を絶。ノリ行。河より。うち。うきは。ゆき。

頭中得

源氏の心懐と云ふ事一内閣侍のつぶねうち出落一
ありふるて、さうしてまことにそぞらひ

「第杏殿女れ 朱雀院の女れ。今上の御内ちり。うきこす人ふ
うきこすものにてよらむ

葛中納云

お預け十日であつて、お詫びも行はる。五月一、伊勢の内侍
の許へおいで下さい。やうやくおのれのそんの日あつへ——と云

卷之三

大抵まことにうよハボウして、ハルマキにて
の筋トハラリトモハリ昇進トシシム

右芳滿筆

うれし下よ女承の時。ちやうのすえ候なふ。又朱雀院内だえ乃
日陵玉もひの一人行はる。内侍中將とも。月參よお告出

うて、娘もまたこつらやうもあくのそんの品
もうひよこへうべー

右大年

卷之六

ひ二人むづづれ志。六条院よりれどもさうへ一時。
ぐでてもつらぬ。又東院れどものちくは日ばかり。さき
日はまづりぬ。行ゆる太中寺。月寒。よふ太中

頭中將

貞本行上　母中納云よ内

より下りて、雲のちりのまの小方へすり、やうと後半
のうらの後、大飛院案大納戸とよどくして、時小方へすりと後、

10

文
九

おひづの間侍

竹川の四月十日冷泉院へまづり詔。父さうの内子。宰相中将。

卷人サ将じよひて一時心づくし
卷人

尚傳

大行は母のゆづりをうけて内侍はうちやど内まつりのよ

大同

六条駕馬
六条駕馬

十九にてまよとくわはるてひすみれや良一

大序

女御

文庫の八文のれぬ

大内

ひめを二人うことみてうれゆもへりよこ

宇治宮小方

たまきと毛らふ

常陸小方

わきはは毎

す治家の小方のりいとこゆ侍ゑどてまよみへき小方
大内を経て後よりの志とうり渡よき陸ふべてよもよも

大内

入道播磨守

近衛中情うちけつ碑とて播磨守よもよ

丸國よて一ノミのりへりとくもつれ上よは海とくも

出山よつもね

明石工

母中勢親王のじまと

松風よし海とくもれて大内にほ一ノミの六条院よもよも

冬力

・按察大納言

・雲林院律師

源氏の志のれそぢ法文もどくもとを治人ちりさう年よ三也
桐壺更衣

あまでゆう時簾とゆうす。身をようす共三位をくも
・按察大納言　　紫上母

・按察大納言　　五節君

かのこ。けづのむとめらわづ。やぞと
・大内　　東北よか大内どり。左近サ侍

ひもれとげごじこ

・權中納言 右房門徒 ありうちらも

左房門徒

源氏守のるゑの内童より（さへ）一一小舟あり、りり
され男よりてひもべぐら、きわにのばすうきぬれがくらや

空蝉君

父中納言（ちゆうなごん）を後づれもけづま（ま）あらえひうちよ下りあ
がちうけびてうらまきあはるえへのびて、内參（うちさん）よりて
とれて後尼（のちね）よりて二条院の東のわん（わん）すみこ

右房門徒女

母との尼（ね）中將（ちゆうじょう）の小方

うせううしてわくひよしも

・參議宮内（さんぎくわい）明石乳母

母院宣旨

源氏よりひだりて明石へまづ松風（まづまつかぜ）よりておへのからみ

三位中將

夕顔上

汝はのかくも翁人の母荷（よか）ごまつてへりくひて、玉
くをうめり、も後夕顔のやどりて、ゆくよあひらよ

宰相

宰相君

おづれあれ、也房六条院（やほくろくじょういん）ますまゆー

參議藤原惟光

母大武乳母

共清尉

童（わらわ）ておどとひまられ、いりふれめおとよ、夕顔乃

文流（ぶんりゅう）一翁（いわん）へつひあり、極（きわ）えよ共清尉、みざくま
うがまれ、うさめりてまつりへ

校典侍

みのるの娘だ。夕方の御子のふくらむ下の侍佐おひひ。

山阿闍梨

惟光がわにミタゲトヨミテモ

サ将令婦

タガキの炎、よしも

三河守妻

夕がよ大哉のあまれやうはあり

前播磨守

源良清

お繁よ、萬人こそうすりぬ。わくよサ納言

二二九。三、五、一、四、九、八、七、六、五、四、三、二、一、〇

近江守を兼む

「又節 しやの寒、コロコロすまうるやうでまくはうるも

左中奇

年凡

卷之三

久三の侍はのりとくのり、むかし大将の首の

四

アヘンの如きをもつてゐる

卷之二

紀伊守

卷之三

卷之二十一

説ト叶一矢志アリ一人もアリ大将次^ス广^マ

のまく

卷之三

うきのふのまじすめ、源氏うきのゆうけのあい

ひくものばく
常陸々
ひくものばくのさ
ひくものばくのさ

常陸久

卷之三

ゆまへのつ

あづまやよ西よりはふつひそく、白文へまづり人
巻人太近傍監いえのゑだ　母おま小こ

卷之三

童
おもひやうめぐらす
おかる

お習のま
ぐせうみのま

源サ綱ム主委

賛岐守妻

少將小方 每今小刀

100

卷之三

てうし
お習のふとソーラーサ樽の引くりアーティ

太宰大猷

太宰大尉
源氏次ノよりモアラバムシテモズレ
トモクル一人
うれしうて次ノへまつり一人

九二

浦底あひ三郎一人より父^{シテ}とて、次广は參る京のう
か。又明石卷^{シテ}とぞうめに卷にももづれりくどくも
太宰サ武^{ミコト}タゞかのノ人のれぞれがとく

豊後久

父ノモテ後モクダカモホシテの御、六条院へワム

第一時 それまでの家司よろづやまき

次郎

三郎

楊名父妻

姉たとこ

おア君

おア太捕

は二へハ行くよめまゝりてあくものひも
タグの巻よも

れもいくよあくつしそのひも

も、あてざとひ、姫よぐとのひも

りんじゆりごそり

母子清門の乳母

あつひよ志の夏は氏よ

人

